

氏名	千葉のり子 (学籍番号 11DN09)
学位の種類	博士 (看護学)
学位記番号	第 10 号
学位授与年月日	2016 年 3 月 8 日

論文題目 急性期病院において認知症高齢者を含む複数の患者を受け持つ  
看護師の困難と対応の構造

論文審査担当者	委員長	市江和子	教授
	委員	川村佐和子	教授
	委員	木下幸代	教授
	委員	久保田君枝	教授
	委員	新宮尚人	教授

## 論文要旨

### I. 研究の背景

我が国が超高齢社会になり、認知症高齢者が増加するとともに、急性期病院の一般病棟に、急性期治療を必要とする認知症高齢者の入院者が増加している。認知症高齢者も肺炎など呼吸器疾患に罹患する者が多く、呼吸器病棟に入院し治療を受ける者は多い。認知症症状を合併し徘徊や大声を出すなどの言動がみられると、看護師は認知症状に対応し見守りによる危険回避を行うことになる。一方、認知症を合併しない呼吸器疾患入院者は、絶えず呼吸状態のモニタリングを行い、急変を早期に発見し、速やかな救命処置が必要となる。看護師は呼吸状態の観察とともに、呼吸苦に対応する精神的な支援を行うことが必要である。認知症状を呈する者と呼吸状態悪化者を同時に看護することは困難がある。

看護配置基準 7 : 1 看護体制はわが国において最も手厚い看護体制であるが、夜間は一人の看護師が 14 ~ 15 人の患者を担当しており、看護師の業務負担は重い (島橋, 2014) 。

そこで、急性期病院の呼吸器内科病棟で、認知症を合併していない患者と認知症を合併している患者を同時に受け持つ看護師の困難と対応について課題にしたいと考えた。

### II. 研究目的

本研究の目的は、急性期病院において、認知症を合併していない患者と認知症を合併している患者を同時に看護している呼吸器内科病棟に勤務する看護師の夜間帯における対応を分析検討し、困難と対応の構造を見出すことである。

### III. 研究方法

研究は 4 つの調査研究で構成した。第 1 調査研究は、研究対象看護師が勤務している A 急性期病院の呼吸器内科病棟における日勤帯の認知症高齢者への看護の実態を調査し、第 2 調査研究では A・B 急性期病院の呼吸器内科病棟に入院している認知症を合併していない患者に病棟看護についての思い

を調査した。第3調査研究は、A急性期病院呼吸器内科病棟に勤務し、病棟看護師達が選出した看護師を対象に看護理念について、グレーザー派グラウンデッド・セオリー法を用いて核概念を抽出した。第4調査研究では、第3研究で抽出された看護理念が調査対象看護師達に共通することを継続的比較分析により確認した。次いで、調査対象A・B・C病院呼吸器内科病棟に勤務する看護師が抱いている看護理念を遂行する上での困難と対応について調査した。聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認（承認番号：11030・13081）を得て実施した。

#### IV. 結果

第1調査研究：看護師6名を研究対象として日勤帯での参加観察と面接調査を行い分析した。結果、A急性期病院の呼吸器内科病棟における認知症高齢者への看護の実態からは、認知症高齢者についての知識と技術をもった病棟看護師の集団であることが示された。

第2調査研究：患者5名の病棟看護への思いは、危険な行動や他の患者の療養を妨げる言動のあった認知症を合併している患者にその都度速やかに対応していることや環境調整に気を配るなど看護師が努力していると患者からの評価を得た。

第3調査研究：看護実践豊富な1人の看護師の患者対応から看護理念について、グラウンデッド・セオリー法と参加観察を用いて分析した。核概念【全員を看護しようとする構え】を見出した。

第4調査研究：第3調査で得られた核概念が本調査対象の全看護師14人に共通することを確認した。調査対象全看護師が抱く、看護理念を遂行する上での困難と対応は、[病棟患者の夜間ニーズ]、[看護師の対応]、[倫理観から生じる思い]の関係から4つのタイプに分類できた。タイプA[理念に沿って看護できる]、タイプB[理念に沿って看護してはいたが悩みを抱える]、タイプC[理念に沿えずジレンマに陥る]、タイプD[全く理念に沿うことができず倫理観への脅威をもつ]であった。タイプAはその場にいる患者の状態の呼吸状態及び認知症症状が安定している場合であり、看護師は全患者に対応でき、看護理念に沿って看護していると思っていた。タイプDは2つの症状を激しく呈している複数の患者がいる場合で、全患者に十分な看護ができず、看護理念に全く沿えないために倫理観への脅威を強く思っていたことが示された。

#### V. 考察

病棟患者集団が認知症症状と呼吸症状という、二つの異なった患者ニーズを持っている場合の受け持ち看護師の困難について、タイプA~Dが示された。この4つのタイプは、看護を遂行する難しさについて断面的ではなく臨床現場の変化する状況への対応の全体像を示すものと考えられた。夜勤帯の病棟全体の状況を判断しその時介入が必要であった認知症高齢者に対応し、看護理念「全員を看護しようとする構え」に沿って看護できる状況から、「全員を看護しようとする構え」に沿うことができず不十分な対応をめぐる自分自身と折り合いをつけたり、専門職としての倫理的責任から脅威を感じる状況が示された。

認知症患者が増加する今後には備え、看護師の困難を医療システムのなかで共有し、業務の安全遂行のために、介護職などの他職種との連携、看護職員の配置の工夫を行い、その取り組みの評価を積極的に行う必要性が示唆される。

## VI. 結論

認知症高齢者を含む複数の患者を受け持つ看護師の困難は、認知症を合併している患者と認知症を合併していない患者のバランスによって、看護理念に沿って対応できるか否か分かれた。その結果生ずる看護師の倫理観に対する思いを、4タイプとして構造化した。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、急性期病院において、認知症を合併していない患者と認知症を合併している患者を同時に看護している呼吸器内科病棟に勤務する看護師の夜間帯における対応を分析検討し、困難と対応の構造を見出すことである。

本研究の特徴は、医療機関である急性期病院の一般病棟で認知症高齢者を含む複数の患者を受け持って看護する看護師の倫理観についてのジレンマを検討していることである。研究は4つの調査研究で構成されている。研究では、グレーザー派グラウンデッド・セオリー法を用いて核概念が抽出された。第4調査研究では、第3研究で抽出された看護理念が調査対象看護師達に共通することを継続的比較分析により確認がされている。調査の過程では、質的データを詳細に収集し、グラウンデッド・セオリー法と参加観察を用いて粘り強く分析している研究者の姿勢が評価できる。

本研究においては、急性期病院の一般病棟で認知症高齢者を含む看護における4タイプが明らかになり、看護の実践への示唆が得られている。認知症状と呼吸症状と二種類の質の異なる患者ニーズに対応する看護は、他の施設においても応用が可能であり、認知症高齢者への看護を考える上で大きな貢献をするものとする。

審査において、看護師の困難と対応の構造の統合図に矛盾が見られたため、本論の構成のタイプの修正点を助言し、再提出された論文について審査委員全員が合格と判断した。

以上、結果から、審査委員全員は、本論文が博士（看護学）の学位を授与するに十分価値があるものと認めた。